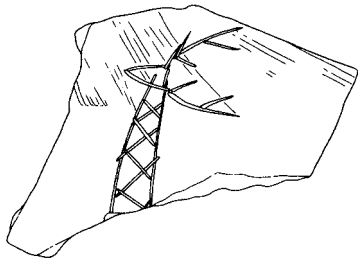


弥生時代を再考する ② 森本六爾と唐古遺跡

天理大学文学部教授
桑原 久男 Hisao Kuwabara

天理参考館所蔵の絵画土器

天理大学附属天理参考館には、奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡で採集された絵画土器の破片が3点展示されている。人物を描いたものが2点、鹿を描いたものが1点で、いずれも、もとは地元の飯田家が所蔵していた資料だ。そのうち、鹿を描いた



唐古・鍵遺跡採集の絵画土器
(図は藤原郁代氏による)

1片には、「昭和十二年四月 池の西側北発見 父隆蔵」という墨書が内面に残されている(藤原郁代1993「天理参考館蔵唐古・鍵遺跡出土の絵画土器について」『天理参考館報』6)。唐古・鍵遺跡といえば、戦前、唐古池の採土工事に伴う発掘調査で、弥生時代の「原始農業」の実態が初めて明らかになったことで知られている。3カ月にわたる発掘が終了したのは昭和12年(1937年)の3月28日なので、土器の墨書に従えば、飯田隆蔵氏がこの土器片を採集したのは、発掘終了直後のことになる。採土工事では、池の西南隅の堤を壊してトロッコの線路を引き入れたのだが、絵画土器が採集された「池の西側北」のあたりは、当時、排土から土器片が採集しやすい状態だったのだろうか。人物を描いたもう1片の絵画土器片には、「所蔵品中発見 父隆蔵 昭和十二年四月十一日」の裏書きがあり、こちらは所蔵品の中から(再)発見されたようだ。

唐古・鍵遺跡はまた、隣接する清水風遺跡と合わせ、全国の絵画土器総数の半数にあたる約400点が一極集中し、絵画土器のメッカのような様相を呈していることでも有名だ。天理参考館の別の絵画土器片には、大正14年の年号を記したものがあり、地元の飯田家の人々が多年にわたって遺物の採集を行っていたことがわかる。こうした採集遺物が考古学者の目に留まり、大正6年(1917年)に鳥居竜蔵博士が先駆的な発掘調査を行ったことで、唐古遺跡(唐古・鍵遺跡の旧称)が広く知られるようになる。大正年間、後に在野の考古学者として名を馳せる森本六爾氏も、畝傍中学校の生徒時代から足繁く唐古遺跡に通い、奈良県内の学校で代用教員を務めていた大正11年～12年(1922～23年)には、唐古池の周辺で、数カ所の試掘調査を行っている。

東京の学術雑誌に論文を寄稿するだけでは飽き足らなくなった森本氏は、大正13年(1924年)、母校・畝傍中学校の先輩、高橋健自博士(東京帝室博物館)を頼って上京し、東京での活動を開始する。同年、唐古遺跡で飯田松治郎氏が採集した絵画土器を学界に紹介し、大小二頭の鹿が並んだ場面を「狩猟生活」を示すとしながらも、山辺郡(現天理市)の岩室発見の弥生式土器片に稲穂の圧痕が存在することから、「弥生式石器時代」の人々が狩猟採集の段階を脱して農耕の生活に入っていたと論じている(「原始的絵画を有する弥生式土器について」『考古学雑誌』14-4)。また、唐古遺跡の試掘調査で出土した土器や石器を詳細に報告し、飯田氏が採集した資料に銅鏃どうそくが含まれることから、遺跡の年代の一点が「金石併用時代」になると考えた。

森本六爾夫妻顕彰碑

三輪山の麓近く、桜井市大泉の道路脇に、植栽に囲まれた一つの石碑がある。昭和56年(1981年)に建てられたその石碑には、表面に「森本六爾夫妻顕彰之碑」の題字、背面に夫妻の功績を記した撰書が刻まれている。森本氏と畝傍中学校の同窓だった堀井甚一郎・奈良教育大学名誉教授による撰書では、森本氏が明治36年(1903年)に同地で生まれたこと、独学で考古学の研究に没頭し、若年にして『日本原始農業』を著して天下に説を問うたことなどを記している。唐古遺跡の発掘調査については、「君



森本六爾夫妻の顕彰碑(桜井市大泉)

の予見的中したるも相共にその成果を見ることなし」と記し、続けて、「嗚呼、二粒の粿、もし成長し結実しあらば」と夫妻の早世を悼み、その功績を讃えている。昭和42年(1967年)、在野の考古学者、藤森栄一氏が著した森本六爾氏の伝記『二粒の粿』では、若き日に教えを受けた森本氏の生涯が闊達な文章で記されている。2019年7月6日、NHKで放映されたETV特集「反骨の考古学者 ROKUJI」は、まさに森本氏の足跡をドキュメンタリーで取り上げる内容だったが、そこでは、新発見の資料を紹介し、関係者のインタビューもまじえながら、『二粒の粿』の内容が役者の演じる再現ドラマの形で構成されていた。

さて、番組でも紹介されたように、上京後の森本氏は、フランスへの留学を経て、「弥生式土器時代」の研究に邁進し、ミツギ夫人とともに、自らが主宰する東京考古学会の会誌『考古学』や著書『日本原始農業』を通して、弥生式文化の原始農業論を論じ、全力で稲作農耕文化の実像を探ろうとした。しかし、昭和10年(1935年)11月、ミツギ夫人が病没し、次いで、翌11年(1936年)1月、夫君の六爾氏も32歳の若さで同じく病没してしまう。ゆかりの地、唐古池の発掘調査は森本氏が他界した11カ月後の同年12月に始まり、多数の「堅穴」から出土した土器や木製品などの資料によって、森本氏が終生を通じて論じた「原始農業」を営む村の姿が明らかになった。学校で学ぶ歴史が皇国史観一辺倒だったこの時代に、実は、弥生時代に関する基礎的な調査研究が、森本氏を中心とする民間の研究者たちによって精力的に行われ、その総決算となったのが唐古遺跡の発掘調査だったのだ。昭和18年(1943年)に刊行された同遺跡の発掘報告書『大和唐古弥生式遺跡の研究』では、発掘直後に地元の飯田氏が採集した絵画土器片も掲載された。今は天理参考館の所蔵資料となったそれらの絵画土器片は、9月9日(月)まで開催中の第84回企画展「祈りの考古学—土偶・銅鐸・古墳時代のまつり—」で展示されている。